

労働者の爲め樹木氏の種別問題を會議に提出せんことを懇請
若し樹木氏の議案が通過したる限り其の存在を許したる

日銀帳尻 十二月一日の
く父鮮銀にも全く右圖像の電
來らず若しお父母の上下に

きより見るにオ政府の撤退は主
ストライキに依りて其の目的を
だ切迫せる問題に非ざる如し
せんとする所詭ダイレクト、

はす即ち榮大將の軍司令官選任
は聊か左遷の觀無きに非ざるも
北道と東地方に出張
原田軍副官 軍司令官に隨行横濱
海に出張中

吾人は無意味にして無益なる卑
劣の小説は取らず。

維新の
野矢
問屋

紀州

陸軍第一〇六砲隊八四番
 機織中園組合重刊販賣部
 新工場製品は品質本位で
 価格も亦最も低廉なり



故寺内伯の面影

寺内伯の面影を思ふに、その人柄は、外見からいへば、厳格な印象を受ける。しかし、その内面は、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

朝鮮の土化さん

伯の望みであった、李完用氏談。朝鮮の土化さんは、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

伯生家

熱一落、ちて悲し。伯生家の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

腕白小僧

伯の少年時代。腕白小僧の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

割合に派手な一面

親の葬式は立派に。割合に派手な一面の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

泥棒多し

龍山の警戒厳重。泥棒多しの物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

皇恩に感銘して

常に愛國心を誦す。皇恩に感銘して、常に愛國心を誦す。その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

御哀悼

追つて御親電。御哀悼の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

除幕式

大山公銅像。除幕式の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

断指決死隊掃蕩

不逞鮮人の集團。断指決死隊掃蕩の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

恩賜金を下賜された

皇恩に感銘して。恩賜金を下賜されたの物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

不平から

給與上の。不平からの物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

知人を襲ふ

ビートル強盗。知人を襲ふの物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

結婚のドロン

結婚のドロンの物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

神仙臺検査

去月未限厳止。神仙臺検査の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

本月の連絡船

本月の連絡船の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

同情的

同情的の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

仁川期米

仁川期米の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

佐博士ノ推奨

胃腸活正。佐博士ノ推奨の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

胃腸活正

胃腸活正の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

胃腸活正

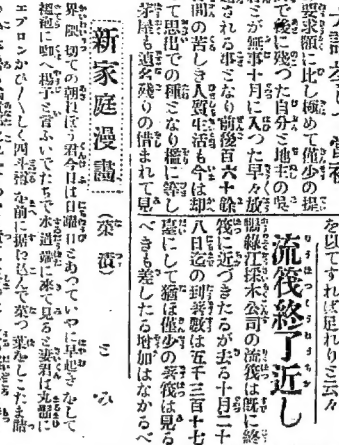
胃腸活正の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

胃腸活正

胃腸活正の物語は、その人柄からいへば、極めて温和で、人々を惹きつける魅力があった。その面影は、故郷の山々や、故郷の人々に、永遠に刻み込まれた。

へ難儀へ入れて山東の郷里へ
つて行つたこの事で、暫ら
れば又戻つて來るとは言ふて

に選拔試験を行ふ事あるべきは、**即死者**なるが、**即死者**は機關手たる鐵



の學費會は概して好成績な
るが中に高等科一年生の
重尾張子夫人は表情、態度
なる諸點限りには特筆一

著が益々迷ひ深からんぞす
無理からぬ次第なるべし

安信株賣物薄

安東信託は昨入電の如く服

目先底入乎

前日來場面買氣旺盛なりし處販地の安移りて手捕へ賣りに買物消化してデリ安歩調と轉せし折

のだね高等教育を受けた女學校の先生が僅か三十五圓とは驚いたものだ△そこへ行くと日給生活の女工の方は此頃劇増々々で

米期は輕々に斷ず可からざる

付かざる折柄にて人氣に乗
て賣物殆ど無きのみならず折
好く此處特品を賣拔けんぞ
少ながらざれば人氣の割

內外興業株式會社
自動車部

内腔かりに立會へば、十三錢の高價に中十錢より一
 圓七十錢中四十圓十錢十錢先六十一錢より七錢と返し
 店賣に十七錢と願ふ先四十六錢と集りに引

第四十九席

喜劇
電九七番
當る拾月廿日より特選三大映畫
○實寫ヒリ酒の製造○滑稽笑け
日活京都派特選映畫松田大合阿

[illegible]

兵庫縣明石市生町石

各支店 及全國 有名な 薬店に 仕置候 陸軍 御用 店品 切の節 は本店 文御上

人蔘江汁

鮮京城津村兄弟商會

町八〇四一 電話 一八七〇番

支店 三城 電話 一五三番

支店 三城 電話 一五三番

(ムツ)に又(ツ)明記

洋装日本七百餘圓 國產五拾錢 目下勸引送共貳圓八拾錢
男女の愛はこれ天の與へし人生の幸福なるも、從來これを秘

各支店 及全國 有名な 薬店に 仕置候 陸軍 御用 店品 切の節 は本店 文御上

人蔘江汁

鮮京城津村兄弟商會

町八〇一 電話一八七〇番
 支店三十三番 電話一八七〇番
 (ムツ)に又(ツ)明記

百球入四

日本柱管株式會社
日本エレーター製造會社
米國キヤボット會社
米國ヘルマン會社
馬淵大石工業商會

東京府長谷川町八十六番地
日米公司
電話二五三〇番

特許鐵筋コンクリート水道管及土管
特許鐵筋コンクリート煙突
東松式エレベーターリフト設計製作
捲物機械クレーンコンベアー設計製作
米國キヤボット會社製塗料各種
米國ヘルマン會社金庫並扉附屬品各種
大石材料並製品

其他建築材料諸器械

濃化粧下

御園の蓄

つばみ　その　み

御園の蓄は濃化粧の時、又襟足を濃く美しく仕上げる時には至つて貴重な白粉で之れをつけて御園白粉を粧ひます。白粉の着きがよく又化粧崩れを防ぎます。

御園の蓄の使用法は至つて手軽で、極少量を掌に取り分け、よく練る様にして襟から顔にかけて、万遍なく丁寧に擦り込むだけで、十分の効能が御座います。

御園白粉
東洋堂製

御園白粉
各藥房發賣元

[illegible]

店

[illegible]

△大進丸十一月十三日正
△三瓶山丸十一月十三日正

六	大連直行	十月十一日 出帆
十三	其九	十月十一日 入帆
十四	其十	十月十一日 出帆
十五	其十一	十月十一日 入帆
十六	其十二	十月十一日 出帆
十七	其十三	十月十一日 入帆
十八	其十四	十月十一日 出帆
十九	其十五	十月十一日 入帆
二十	其十六	十月十一日 出帆
二十一	其十七	十月十一日 入帆
二十二	其十八	十月十一日 出帆
二十三	其十九	十月十一日 入帆
二十四	其二十	十月十一日 出帆
二十五	其二十一	十月十一日 入帆
二十六	其二十二	十月十一日 出帆
二十七	其二十三	十月十一日 入帆
二十八	其二十四	十月十一日 出帆
二十九	其二十五	十月十一日 入帆
三十	其二十六	十月十一日 出帆
三十一	其二十七	十月十一日 入帆
三十二	其二十八	十月十一日 出帆
三十三	其二十九	十月十一日 入帆
三十四	其三十	十月十一日 出帆
三十五	其三十一	十月十一日 入帆
三十六	其三十二	十月十一日 出帆
三十七	其三十三	十月十一日 入帆
三十八	其三十四	十月十一日 出帆
三十九	其三十五	十月十一日 入帆
四十	其三十六	十月十一日 出帆
四十一	其三十七	十月十一日 入帆
四十二	其三十八	十月十一日 出帆
四十三	其三十九	十月十一日 入帆
四十四	其四十	十月十一日 出帆
四十五	其四十一	十月十一日 入帆
四十六	其四十二	十月十一日 出帆
四十七	其四十三	十月十一日 入帆
四十八	其四十四	十月十一日 出帆
四十九	其四十五	十月十一日 入帆
五十	其四十六	十月十一日 出帆
五十一	其四十七	十月十一日 入帆
五十二	其四十八	十月十一日 出帆
五十三	其四十九	十月十一日 入帆
五十四	其五十	十月十一日 出帆
五十五	其五十一	十月十一日 入帆
五十六	其五十二	十月十一日 出帆
五十七	其五十三	十月十一日 入帆
五十八	其五十四	十月十一日 出帆
五十九	其五十五	十月十一日 入帆
六十	其五十六	十月十一日 出帆
六十一	其五十七	十月十一日 入帆
六十二	其五十八	十月十一日 出帆
六十三	其五十九	十月十一日 入帆
六十四	其六十	十月十一日 出帆
六十五	其六十一	十月十一日 入帆
六十六	其六十二	十月十一日 出帆
六十七	其六十三	十月十一日 入帆
六十八	其六十四	十月十一日 出帆
六十九	其六十五	十月十一日 入帆
七十	其六十六	十月十一日 出帆
七十一	其六十七	十月十一日 入帆
七十二	其六十八	十月十一日 出帆
七十三	其六十九	十月十一日 入帆
七十四	其七十	十月十一日 出帆
七十五	其七十一	十月十一日 入帆
七十六	其七十二	十月十一日 出帆
七十七	其七十三	十月十一日 入帆
七十八	其七十四	十月十一日 出帆
七十九	其七十五	十月十一日 入帆
八十	其七十六	十月十一日 出帆
八十一	其七十七	十月十一日 入帆
八十二	其七十八	十月十一日 出帆
八十三	其七十九	十月十一日 入帆
八十四	其八十	十月十一日 出帆
八十五	其八十一	十月十一日 入帆
八十六	其八十二	十月十一日 出帆
八十七	其八十三	十月十一日 入帆
八十八	其八十四	十月十一日 出帆
八十九	其八十五	十月十一日 入帆
九十	其八十六	十月十一日 出帆
九十一	其八十七	十月十一日 入帆
九十二	其八十八	十月十一日 出帆
九十三	其八十九	十月十一日 入帆
九十四	其九十	十月十一日 出帆
九十五	其九十一	十月十一日 入帆
九十六	其九十二	十月十一日 出帆
九十七	其九十三	十月十一日 入帆
九十八	其九十四	十月十一日 出帆
九十九	其九十五	十月十一日 入帆
一百	其九十六	十月十一日 出帆

元師寺内伯薨去の報は、
たび傳へられたるが、

生別死別
 日許許蘭蘭行
 服部 親目
 母と子と
 第拾七

宮崎虎之助氏講演

[illegible]

神仙爐

ての手廻りを十分に發揮し、其甚難かきは同じものであるが、要するにこそ難くない。人をして永く敬仰せしめる所は唯此の形式だけでない。佛敎は印度に於て現はれたる七年、政治薄く冷甚、故には猶太人に於て現はれたる佛敎は猶太人に對して少しく磨かれてゐる創案を見、母は一入底に啞んだ。

「冷徹を見る」

居候なさは氣が通入らうと

各す對

劍花坊

矢張り易き川柳三首

對

各

新時代

新材實却公告
新材王六尺縮（在花園）
上賣却許細八會計
承合セラルヘシ

李王

朝鮮總督府

監料紙屑以事、前號古木
被服、被褥、空桶類、第
二牌下、餘車八十二、一
朝知總督府官報ヲ

○東寺赤坂町後司
 通信社 振替東京 四九章武

[illegible]

同京平京
地安地

◀項要集募▶

靠掘毛發
萬拉倫起

公

公募ノ理由
 當社ハ株式ハ東垣、河内、大倉ノ中心トスル
 緊要人及重要ノ事業ヲ經營スルニテ以テ通シ幾行數行ヲ超過スルノ好況ニ早セ
 ヲモ登人ハ元來ノ國貨ヲ振興スルニ一而兩國ノ社及非の使命ヲ常ノ力點ニ體メ振
 立然トナシ、國貨ノ利益スヘル、國家ノ社及非の使命ヲ常ノ力點ニ體メ振
 立然トナシ、國貨ノ利益スヘル、國家ノ社及非の使命ヲ常ノ力點ニ體メ振
 立然トナシ、國貨ノ利益スヘル、國家ノ社及非の使命ヲ常ノ力點ニ體メ振

[illegible]

大平元同京同平釜同同京同同鎮同鎮同鎮
 邱塲山 城 塲山 城 浦道 浦
 吉米能智韓大大大張趙張富西西長馬
 村山谷田 田橋池垣 田崎島谷
 仙久要靈 之 恒忠史 斗采須 鶴川
 雄彌助吉龍助藏助大絃澤泰作郎羅建義
 京大公同同京全同同京平大同同同
 城阪州 城北 城南阪
 朱鳥金金金木水 飯天吳古蒲爾蘇松
 性 潤漢溶用 木上 城 井本村本
 德 常高 武元 粉時
 食良次 官次之忠太
 根發義奉泰生二信郎股堂郎助助助勉


[illegible]

實石入指環品揃
グラス、四拾五圓、
眼鏡、百圓、稀、
並、眼鏡、乙、十五圓、
銀、用、付、中、
町、目、

◎ 定價表進呈可仕候

○ 活字

○ 櫻井活版製造所

毎月一日休業
 京城材木商組合
 電話 三六二一
 電報掛 京二五番
 支店
 京城熊平
 設備ありヤ
 (ボンプカタロク進呈)


堀井膳寫版

▲運動用具▲

堀井を冠せるもの斯界の白眉なり

堀井膳寫堂 京城出張所

東城摩大門通丁目

從西曆四〇二一年 振替掛一〇五八番

